

秘術の公開

江戸時代の手品本に見られるまじないについて

横山 泰子

Publication of Secret Arts : Incantations in Books of Magic Tricks during the Edo Period

YOKOYAMA Yasuko

まえがき

① 手品と仙術

② 秘術を本にする時代

③ 様々なまじない

あとがき

【論文要旨】

江戸時代に日本で作られた手品の解説本の中には、手品のみならずまじないの情報も掲載されている。こうした記事は手品史の観点からはあまり注目されないが、奇術と呪術が渾然一体となっていた当時の人々の感覚を知るうえで面白い研究対象といえる。

本論では、中国の『神仙戯術』の翻訳からはじまる近世日本の手品本を概観し、その中に記されたまじないを取り上げた。初期の『神仙戯術』や『続神仙戯術』は、手品をはじめ、呪術や生活術などを集めている。もともと中国でも、種や仕掛けを用いて不思議な現象を見せる娯楽としての手品と、まじない等の情報が混在していた。日本の手品観は、中国の手品観の影響を受けていると思われる。また、中国の呪術と似たものが日本の本にも見られるので、文献を通じて中国のまじないが日本人の日常生活の中に浸透していったと考えられる。ただし、まじないの方法には日中で異動がある。外国の呪術は、日本の生活環境にあうよう、改変されて伝えられたのだろう。

本来まじないは口頭で秘密裏に伝えられるものだったと考えられるが、江戸時代においては生活上の実用的な知識として本に記されて流布した。奇しくも、まじない本や手品本、占い本等のいわゆる「秘術」を公開する文献は、十七世紀後期に刊行されはじめた。この時期を日本における秘術公開時代の幕開けと考えてみたい。手品本のまじないは、先行の呪術系の書物に類似するものが見られる。専門書の中のまじないの情報が、手品本の中に流入していったものと思う。

手品本に記されたまじないには、呪歌を伴うものや、書記行為を伴うものがある。近世日本では、十七世紀から民衆の識字率が向上したが、そうした社会的背景が、手品本の存在や字を書くまじないのあり方と関係している。行為者の能力や資質にあわせて、様々なまじないができるようになっていくところに、江戸時代のまじない文化の大衆性を感じる。

【キーワード】手品、日本、比較文化、まじない、秘術

まえがき

「人間はお守りを身につけ、動物は身につけない」とは、フランスの作家ヴェルコールによる人間本性の定義である。

ヴェルコールの小説『人獣裁判』の中では、人間と限りなく近い架空動物「トロピ」が描かれる。「トロピと人はどう違うのか」との判断に迷った登場人物は、結局「人間とは何か」を定義せざるをえなくなる。作中「人間はお守りを持つ」と語るドレーパー夫人の説明を読んでみよう。

「何かを信じさえすれば、お守りが要るようになります、(中略)自分では何も信じないと称している人たちでも、やっぱり探し求めているんじゃないでしょうか。——そういった人たちは……物理とか……占星術とかを研究しますし、また本を書いたりしますけれど、やっぱりそれだってお守りですわ。それはその人たちなりの流儀なんですわ、その……その人なりの身の守りかたなんですわ。よくよく考えてみると私たちに恐怖を起させるものがあるでしょう、そういうあらゆるものに対して自分を守るわけですわ」⁽¹⁾

人間は恐怖心ゆえに、安心を求め、単純であれ複雑であれ「お守り」を身につける。そこが、動物との大きな違いであるというのだ。「人獣裁判」は学術書ではないが、人間を「お守りを持つ存在」とする見方は、なかなか面白いと思う。じつさい、お守り(護符または呪符)とは、種々の災難を除ける神秘的な力を持つと信じられている物体であり、世界中の宗教に古今を通じてみられる。⁽²⁾

本共同研究の名称は「兆・応・禁・呪の民俗誌」である。「兆応禁呪」

のうち「呪」は、災いを防ぎ身を守る手段であり、お守りを持つことも含む。人間が本質的にお守りを持つ存在なのだとすると、「呪」は、人間の本来の表現といえよう。私は、江戸期に出版された手品の解説本(伝授本)の調査をした経験があり、そこに見られる特定の手品について論じたことがあるが、⁽³⁾伝授本の中に奇術の方法とともに載っている呪術に関する記事にはあまり注目してこなかった。このたび、「兆・応・禁・呪の民俗誌」に参加する機会を得たので、あらためて、江戸時代の奇術と呪術の関連について、考察してみたいと思う。

①手品と仙術

日本で最も古い手品の本は、元禄九(一六九六)年の『神仙戯術』である。これは明末の陳眉公が著述したものを日本語に翻訳したものである。『神仙戯術』の訳者は明示されていないが、続編『続神仙戯術』が馬場信武(京都の医師)の名で出されていることから、正編も彼の手によるものではないかと考えられている。⁽⁴⁾『中国芸能史』によれば、「考証によると陳眉公の著わしたものとされている。しかし明代の著名な学者である陳眉公の著作を調べてみても、このような書物はない。だから陳氏の名を借りて書いたのか、それともやはり陳氏自らの手になるものかはわからない」⁽⁵⁾ということだ。なお、中国では『神仙戯術』は失われてしまったが、奇しくも日本に伝わり、翻訳されたことは幸いであった。

『神仙戯術』の内容を、以下に挙げてみよう。⁽⁶⁾

- 1 白雲洞二帰ル
- 2 滾地葫芦
- 3 水上二灯ヲ點ス
- 4 皓月亭二入ル

- 5 胡蝶ヲ喚ヒ来ル
- 6 暗ニ書ヲ伝フル法
- 7 雪裡ニ灯ヲ點ス
- 8 鬼火ヲ吹ク
- 9 紙ヲ吹イテ鶏子トス
- 10 盆中ニ魚ヲ走ラシム
- 11 手帕ヲ以テ酒ヲ盛ル
- 12 紙ヲ焼イテ人ノ如クニ起ス
- 13 戯レニ胡蝶ヲ聚ル
- 14 蚊子ヲ辟ルノ法
- 15 紙ヲ以テ胡蝶飛バス
- 16 燕子ヲ辟ルノ法
- 17・18 狗蚤ヲ除ク法
- 19 蟻蚋ヲ辟ル法
- 20 木虱ヲ除ク法

である。項目だけではわからないが、内容をみると、物理的に不可能と思われる現象を有効な仕掛けによって作り出す「手品」と、それ以外が混在していることに気づく。そして、二十種のうちどれを「手品」とみるかは、研究者によって異なり、山本慶一は、2、3、4、6、8、9、10、11、12を「手品」とし、松本光伸はそれに15を加えている。つまり、両者とも、『神仙戯術』の半分程度を手品と認識している。

『神仙戯術』のうち、純正な手品として、2の「濱地葫声」を見てみよう。これは「ひょうたんおのれとうごく術」と訳されているが、ひょうたんの内部にウナギやドジョウを入れ、胡椒と塩を混ぜた水を加えると、魚が動く。それによって、ひょうたんが自然に動くように見えるという仕掛けである。種明かしを読むと「何だ」と思うような単純な手品

であるが、それはトリック全般にいえることである。動かないはずのものを生物の力で動かす技は後の手品本でもしばしば見られるので、当時好まれたのであろう。

また、10は、作りものの魚を水中で泳がす方法で、工作の魚に樟脳をつけて水に浮かべると動くという手品である。樟脳はクスノキの木片を水蒸気蒸留して得る無色半透明の結晶で、防虫剤や医薬品として使われる。樟脳を用いた手品は、科学的な知識と結びつき、現在でも子ども向けの科学実験として行われている。私自身、樟脳船（紙やセルロイドで作った船に樟脳をつけて水面を走らせるおもちゃ）で遊んだ記憶がある。

『神仙戯術』は、以上の如き手品の仕掛けを日本で最初に紹介した文献である。しかし、実情は、手品とみなされない情報が内容の半分を占めるのであった。たとえば、14は「蚊をよせつけない方法」であるが、「五月五日午ノ時灯心草ヲ将テ油ノ内ニ浸シ太陽ニ望シテ呪ス 曰ク天上ノ金鶏蚊子ガ脳髓液ヲ喫セヨ 太陽ノ氣ヲ吸テ于灯草ノ上ニ吹ク夜灯草ヲ点ス 蚊子ヲ照セハ去ル」と書かれている。灯心草（いぐさ）を油に浸して取り出し、太陽に向かい、「天上の金鶏、蚊の脳髓液を喫せよ」と七回唱える。太陽の生気を吸い、灯心草に吹きかけ、夜になってこの灯心草に火をつけると、蚊が寄りつかなくなるといふ。「呪」の文字が文中に含まれているとおり、蚊をふせぐまじないである。

また、16は、燕が巣をかけて毎年来るのを防ぐ方法である。「白紙ノ上ニ鳳凰ノ二字ヲ書ス 以テ燕窠ノ上ニ安クトキハ即チ去テ此ニ来ラス」とあり、白紙に「鳳凰」と書いて燕の巣に置いておくという対処法である。17と18は蚤の除去方法で、「五月五日石菖蒲ヲ採テ乾ス末ト為シ席下ニ放在ス 蚤即チ去ル」「藜子ヲ以テ床ノ下ニテ焼ク 諸々ノ狗蚤悉ク去ル」の二種類が書いてある。石菖蒲（サトイモ科シヨウブ属の植物、和名セキシヨウ）もナツメも生薬として用いられる植物で、その

薬効が防虫にも役立つとされているのである。19の蟻を防ぐ法は、竹細工の鶏四個を四つのかごに入れ、部屋の四隅に置くと、蟻が入らないという。これらはいずれも、手品の範疇には入れられない。

続編『続神仙戯術』も、『神仙戯術』同様、手品をはじめ、呪術や生活術などを集めている。正編同様、二十種の項目を載せるが、そのうち手品とみなすことができるものは八種である。中には不可解なものもある。例えば「使鬼打門」は夜門を叩く音をさせる方法であるが、天南星（サトイモ科テンナンショウ属植物の総称）の球茎を粉末にし、酢で練る。それを白紙の上に塗って、人家の扉に塗ると、夜中、人が扉を叩くような音が聞こえるという。上述の方法で門を叩く音が出せるとは思えないが、グロテスクな形の花をつける天南星を使うことによって、奇怪な現象を起こすという発想かもしれない。また、「猫ヲ描イテ鼠ヲサケル」は、予め作っておいた猫の木像に、赤鼠の尿を絵の具に混ぜたものを塗ると、鼠が来なくなるというもの。鼠よけに猫の像を使うというのは案山子の原理にも似ている。「一年中ノ水早ヲ知ル」は、年間の雨量をあらかじめ知る方法である。陰暦正月十五日に、一丈の竿を立て、月が真南の時の影の長さをはかる。七尺あれば豊作、九尺一丈あれば長雨で水が多く凶作、五尺は日照りで、三尺は大干魃だという。これは一種の占いであろう。「茄ヲ嫁スル之術」は茄子を多く実らせる術で、花が咲いたところにその花を燃やして灰にする。その灰を路上に葉の形にまいておく。通行人が踏むと、茄子が多く実るといふもので、まじないと考えられる。

以上のように、『神仙戯術』と、それを模範とした『続神仙戯術』では、種や仕掛けを用いて不思議な現象を見せる娯楽としての手品と、まじない等の情報を混在させている。手品研究者たちにとって『神仙戯術』は日本最古の文献として貴重であるが、手品以外の情報も多いため、松山光伸は「奇術書というよりはむしろ面白実用豆本」と形容して

いる。⁽¹⁰⁾ 続編の『続神仙戯術』については、山本慶一が「漢籍諸書からの書抜き寄せ集めで、内容は得る所が少ない」と述べている。⁽¹¹⁾

たしかに、手品の専門書として眺めた場合、正統『神仙戯術』は余計な情報に満ちている。しかし、本場中国において、戯術あるいは戯法とは、元来こうしたものだったのではないだろうか。中国の手品の文献は少なく、『神仙戯術』の後に刊行された有名なものに、清末の唐再豊著『鵝幻彙編』がある。⁽¹²⁾ この書では演目を「手法門」「糸法門」「彩法門」「搬運門」「薬法門」「符法門」の六種に分類している。はじめの四部門はトリックやからくりが使われているもので、通常の手品として考えることができるが、残りの二部門は「薬法門」（薬品を使ったもので、化学的）「符法門」（護符を使うなどして行う呪術）である。中国ではいわゆる手品と薬学、そしてまじないが渾然一体となっていて、それが文献に反映されているのではないだろうか。そして、『神仙戯術』の和訳者だった人物は、中国人のものの方、すなわち呪術と奇術、さらに医学を細かく分けるのではなく、一体として扱うという発想を学んだに相違ない。続編『続神仙戯術』も、正編同様、手品やまじない、薬の使い方などを別々のものとしてではなく、関連性を持つものとして扱っている。

そもそも、『神仙戯術』という書物の題名そのものも興味深い。中国では、仙薬とされる薬品を服用すると仙人になると考えられていた。さらに、仙人は、人々に薬効の高い薬を人々に提供して救済したり、術と予言能力を持って、自然災害から人を守ったりした。それゆえ、中国の仙人は、生命を救済するとして、祀られ、信仰されたのである。⁽¹³⁾ つまり、中国的な考えによると、仙人とは、薬学や呪術に通じた神秘的な存在であり、神仙戯術なる書物の名も、そうした仙人観を反映している。そして、私たちが現在「手品」とみなす種や仕掛けによって不思議な現象を見せる遊びをも、仙界の術の一つとして扱っているのである。

こうした中国の手品観は、日本にも影響を及ぼしている。日本では、正統『神仙戯術』以後、明治末年に至るまで木版和装の伝授本がおよそ一五〇種ほど刊行されたが、初期の手品本には、麗々しい序文が書かれていることがある。手品を仙界の秘技密法であるかのように説くものもあり、当時の手品観が伝わってくる。例えば、『唐土秘事海』は

夫^レ秘を秘とするハ、誠の秘にあらず。不秘の秘、是妙秘也。其秘也、明知のなす所にして、疑怪によて、其至知を究む。故に其及と及ざるの二ツ有て、不知の知、知の不知あり。今也、撰ずる所の怪術ハ、山海経の海内北経に曰、蓬丘山あり、一名ハ雲萊といふ東海の内にあり。高さ一千里、北の広さ三千里、金台玉闕あり。これ神仙の都、上帝遊息の地にして、乾坤の諸仙等此所に集て、九節の菖蒲酒に酔て奇怪をなせし数卷、ふしぎの古筭より出しまゝ、古い事ながら桜木にうつさハ、一笑の舌打ならんと、筆をならぶる事左のことし⁽¹⁴⁾

という。中国の仙人の秘術をあらわすという設定であるが、その著者名とは「環中仙」である。この人物・多賀谷環中仙は、尾張の人で名を不破仙九郎といい、京都に住み、環中にあつたので環中仙と号し、『唐土秘事海』の他、『珍術さんげ袋』などの手品本や、からくりの謎解き本『環訓蒙鑑草』を書いた人物である。漢方医で算法に通じ、『初心算法早伝授』などの著書もある。馬場信武同様、環中仙も医者であつた。ここにも、医療と手品との結びつきが見られる。伝授本の作者が、自らを仙人に擬しているところに注意したい。

以上の如く、江戸期の手品は、仙人たちの秘術の一つとして位置づけられていた。もちろん、著者たちが仙人として祀られ信仰されていたわけではないが、本の題名に、しばしば「仙術」「仙曲」といった「仙」

の字が使われているのは当時の手品観を反映しているのである。まじないや占いが手品とともに並べられるのは、明治期の手品本にもみられる現象だ⁽¹⁵⁾。また、明治二十六（一八九三）年に渋江保が西洋の奇術書を『魔術』の題名で翻訳した時、筆名を「羽化仙人」とした例もあり、ここでも手品と仙界が結びつく。以上のように、過去の日本人にとって手品とは、まじないなどとひとくくりにされる、仙術の如きものであつた。

② 秘術を本にする時代

正統『神仙戯術』を考えるうえで、比較文化的な観点から興味深いのは、英国の事例である。日本で『神仙戯術』が刊行されるのに先立ち、一五八四年の英国ではReginald Scot（レジナルド・スコット）が著書で手品の解説を試みた。彼は、著書 *Discoveries of Witchcraft*（『魔術の暴露』）で、およそ五十種の手品の解説をしている⁽¹⁶⁾。スコット自身は、プロのマジシャンではなく、教養ある農場経営者であつた。彼は現役のフランス人奇術師から技術を習得し、著作において種明かしを行った。スコットの『魔術の暴露』は、その題名にあるとおり、魔術とされている現象を暴露するために書かれた、悪魔学の書物である。悪魔学といつても、『魔術の暴露』でなされているのは、悪魔や魔女や魔法使いと手品は無関係だという主張である。当時は魔女狩りの時代で、悪魔や魔女は実在の存在と考えられており、手品は悪魔の用いる恐ろしい術として危険視されていた。そうした時代において、スコットは、不思議な現象を行う人間が魔女や魔法使いであるとは限らないと考えた。それを証明するために、プロの手品師の芸を調査し、自ら練習までした。さらに、手品の種明かしをしてみようと、それで生計を立てているプロの芸能人の仕事の妨げになることを心配しつつ、『魔術の暴露』をのこした

のであった。

手品の神秘性を否定し、いかに魔法と無縁であるかを説明した『魔術の暴露』が、英国における最古の手品本であることを確認したうえで、『神仙戯術』を見よう。すると、同じ手品本とはいっても、仙人の術であることを標榜する中国や日本との発想の違いに気づく。魔術否定という意図をもった『魔術の暴露』は緊張感に満ちているのに対し、正統『神仙戯術』は、きわめて雑然としている。後者は思想性がなく、遊興的であり、なおかつ断片的といえる。

さて、『神仙戯術』が作られたのとはほぼ同じ頃、まじないの本の刊行も始まったことに注目したい。一般向けに出されたまじないの本として、おそらく最初のものは『咒詛調法記』（元禄十二年 一六九九。以下、『咒詛』と略す）である。同書に収録された三二二項目のうちには、生活のさまざまな面にわたって行われるまじない（呪文や呪歌、呪符や守などの図や絵）のほか、病気やケガに関する民間療法も収録されている。さらに、元禄十四（一七〇一）年には、続編として『陰陽師調法記』（以下、『陰陽師』と略す）が出され、一三二項目がおさめられた。安永十（一七八一）年には前著を整理して目録をつけた『増補呪詛調法記大全』（以下、『増補』と略す）が、天保十三（一八四二）年には『増補呪詛調法記大全』をもとに家事の手引を加えた『新撰呪詛調法記大全』（以下、『新撰』と略す）が刊行された。民俗学の小池淳一は、『咒詛』を分析し、「江戸時代は医療とまじないとの境界が曖昧であった」と指摘している⁽¹⁷⁾。

筆者は手品本の内容からして、江戸時代は医療とまじないのみならず、手品と占いなどの境界も曖昧であったと思う。そして、本の書き手の人物像からも、そのことはいえると考えられる。『続神仙戯術』続編の編著者馬場信武は医者で、医業のかたわら卜占書を著し、中国的な占術知識の普及に重大な影響を及ぼした人物であった。彼の和解・俗解した卜

占書は実用性が高く、占いを生業とした人々（陰陽師ら）に利用されたという⁽¹⁸⁾。かくのごとく、当時は医療も占いも手品もまじないも有機的な連関を持っており、その情報は著作を通じて世間に流布するようになっていた。この点を、私は重視したいと思う。

ここで再び海外に目をやり、文化人類学者のレイヴンストロースが『構造人類学』の中で出している事例を思い出すことにしよう⁽¹⁹⁾。カナダのヴァンクーヴァー地域のケサリードという男が、呪術師に弟子入りする。呪術師の力を信じない彼は、その種明かしをしたかったのである。じじつ、彼が教えられたのは「無言劇と奇術と経験的知識の奇妙な混合」であった。ところが、皮肉なことに、ケサリードが行った術が成功し、患者の病気は治る。結果として、彼は呪術師として有名になり、他の呪術師と術くらべをして、勝利する。敗北したライバルは、ケサリードに術の秘密を教えてくれるよう懇願するが、拒まれ、不幸なことに発狂してしまうのだった。このような社会では、医療と手品が混合した形で呪術師の管理下にある。術の秘密は呪術師以外には決して知らされないのだ。呪術の力を信じなかったケサリードは合理的な思考をする人物だったと思われるが、当人が強力な呪術師とみなされてしまった以上、当該社会で生きていくためには、自分の術がインチキだということはできず、秘密を守り続けなければならない。こうした状況下では、専門家の秘密は常に秘密として保たれるのである。

『神仙戯術』が世に出た頃の、元禄頃の日本でも、医療とまじない、そして娯楽の境界は曖昧模糊としていた。当時の日本社会においても、「無言劇と奇術と経験的知識の奇妙な混合」といふべき秘術がまた存在したに違いない。奇術も呪術も占術も医療も、神秘的な現象を操る秘術とみれば共通している。それら秘術は、元来専門家集団が管理するもので、日本においても元々はそうであった。しかし、我が国の場合、十七世紀後半から諸々の秘術は出版物を通じて公開され始めていたのであ

る。『咒詛』を見れば、お守りを作る方法や、まじないのしぐさ、呪文などが、『神仙戯術』をめぐれば、まじないの他、多くの手品の仕掛けがわかるようになっていたのだ。さらには一般人が手引書「元三大師籤本」を見て、自分自身のためにおみくじを引き、運勢を占うことも可能となった⁽²⁰⁾。まじない本や手品本、占い本の文献が刊行されはじめる十七世紀後期を、日本における秘術公開時代の幕開けと考えることはできないかと思う⁽²¹⁾。

もつとも、いかに秘術を本にしたところで、字を読めない人間にとって、文字で記された事柄はわからないままである。本による秘術の公開といっても、その秘術を知るにはまず字が読めねばならない。そこで、識字率の問題を考える必要がある。ここに示したグラフ1（全国寺子屋創立年代）は、家相書研究の宮内貴久の制作したものである。これをみると、寺子屋の数は明和安永頃から漸増し、天明寛政期に飛躍的に増加、文化文政期に激増している。つまり、十七世紀から民衆の識字率は向上し、十九世紀にかけて、字を読め

グラフ1 「全国寺子屋創立年代」

宮内貴久『風水と家相の歴史』吉川弘文館 2009年より転載

る層が飛躍的に増大するのである。また、識字率の向上は、出版文化とも関係している。グラフ2は、国書総目録のデータをもとに橋口候之介が作った「江戸時代の書物成立数」であるが、江戸時代を通じて書物の数が確実に右肩上がりで増大したことがわかる。十七世紀後半の秘術公開開始の頃から百年ほどたった十八世紀後半以後、江戸時代後期の社会においては、活字化された秘術情報を読んで活用することができる人々が増えたと推測できる。

以上をふまえて、手品解説書の変容に問題を絞ってみよう⁽²²⁾。前述し

グラフ2 「江戸時代の書物成立数」

橋口候之介『続和本入門』平凡社 2007年より転載

たように、元禄の『神仙戯術』から日本の手品本の歴史は始まり、優れた本が次々と作られ、寛政頃までが黄金時代とされる（第一期）。この頃の本は、上下あるいは上中下三冊の贅沢な造りで、値も高く、裕福な商人層しか買えなかったと考えられる。第二期は文化文政頃から江戸末期に及ぶ時期で、手品本が一冊になり小型化する。第二期の本は、価格を下げて多くの読者を対象としており、手品趣味が社会により広まったことをあらわしている。

第二期の本は、内容的には第一期本の焼き直しが多く、解説も簡略化されているので、総じて読み応えはなくなる。奇術研究という点では、第二期は見るべきものの少ない時代と認識されてしまいがちだ。この時期のものは、手品好きの金持ちという限定された読者ではなく、より一般の人々の興味や関心に訴えようとしている。そのためか、第一期よりも手品以外のまじない等の情報を増やし、いよいよ雑然とした印象を与える。次節で具体的にみてみよう。

③ 様々なまじない

江戸期の伝授本のうち、最も多く刷られたとされているのは施本『秘事百撰』である。これは、文政十(一八二七)年刊で、最初は施本として功德のために無料で配ったものと考えられる。著者智徳斎は漢方医で、本名を船越敬祐という。伯州米子から大坂へ出て医業に励んだ。百カ条の項目のうち、手品は三十八種で、その他は料理、呪い、妙術、秘事、便法などを取り混ぜている。『秘事百撰』⁽²³⁾にもまじないが載っているのも、それについてみておきたい。

『秘事百撰』(以下、『秘事』と略す)には歯痛の時の対処法として、「東を向いた桃の枝を取って楊枝に削り、痛む歯に「南」という字を三度書き、歯で楊枝をくわえ、あびらうんけんそわかと三度唱える」という呪術が紹介されている。また、小児の疳の虫について、『秘事』では「よき晴天の巳の時に白胡麻の油を手の甲指額に塗、日輪に向けて、居らしめ手を合させて、我が口のうちに 小松かきわけ出る月 其下かげにとるぞかんのむし とよむべし。一時すぎて白髪の様なる虫多く出るなり。目に入ぬ様に直にとるべし」とある。また、『秘事』の「焼火箸を手にてしごく法」は「こふこふ白狐と三度よみアピラウンケンソワカと三度唱へ手に息を吹きかけ火ばしをすこくなり 手やけずあつき事な

し 此法をみだりに行へばばちをうくるなり 狐つきなどをおそらかし
て落すにはよろし」と書いてある。焼火箸に触れても火傷をしないです
む呪文が、狐つきにも有効だというのだ。

こうしたまじないの情報の源はどこなのだろうか。試みに『秘事』に
おさめられた呪術の記事が、他のまじない本の記述と重なっているかど
うかを検討してみる。虫歯の対処法をみると、『咒詛』では符を飲むこ
とになっており、『秘事』とは異なるが、『陰陽師』『増補』では、桑の
木を楊枝に削って口にくわえ、真言を唱えるというもので、『秘事』に
似ている。また、人喰犬に対する呪いとして、『秘事』では「我は虎
いかになくとも犬は犬、獅子の歯がみをおそれざらめや」という呪歌を
となえるように書いてあるが、これと同じものが『咒詛』『増補』『新
撰』に載っており、当時はかなり知られた呪文であったのではないかと
思われる。喉に魚の骨が立った時は、『秘事』は「九龍化骨守護身」と
いう呪文を杯のなかへ書き、水で飲むまじないを紹介する。『咒詛』『増
補』では異なる呪文、『陰陽師』『新撰』では『秘事』と似たしぐさをす
ることになっている。

また、『秘事』にはやけどの際には「猿沢の池のほとりにありけるが、
あじろの入道をふてこそいれという歌を三度よみ、やけどの所を口にて
吹くまねを三度して、またその所を足にてふむまねを三度すべし」とあ
るが、これと同じ内容が『陰陽師』にも見られる。このように、文政十
年の『秘事』のまじないは、呪術の本と一部内容が重複していることが
わかる。

また、著者智徳斎が周辺の宗教者から直接呪術を伝授された可能性も
あると思う。智徳斎は漢方医船越敬祐とされ、船越敬祐名義の医書に、
『妙薬奇覽』(文政十年 一八二七)、『徴毒軍談』(天保九年 一八三八)、
『徴毒茶談』(天保十四年 一八四三)などがある。これらの本の執筆の
ため、四方に漫遊し、多様な民間療法を学んだ船越が、修験の医療文化

と無縁であったとは考えられない。『秘事』のまじないの記事は、先行する呪術書の引用や孫引き、そして修験者からの伝承などが混ざっているのではないかと思う。

『秘事』の他、挿絵の面白い『妙術智恵鑑』（著者不明、江戸末期）も見ておこう。この書には、「相生茶碗の傳」のような手品も含まれているが、まじないなど生活情報も載っている。例を挙げよう。「鼠の出ぬ伝」は、「鼠一匹生け捕りにしてかなあみの箱へ入れ置くべし」とあり、いわゆる見せしめ作戦で、仲間の鼠を追い払うものである。『統神仙戯術』では、鼠の天敵（猫）の作り物を置いて撃退する方法が紹介されていたが、どちらの方法も現代でも生き物の駆除に使われうる普遍性があるように思う。「耳だれの妙薬」（図1）は「せみのぬけがらを黒焼きにして胡麻の油に溶き、耳につけよ」というものだ。²⁴

図1 『妙術智恵鑑』
東北大学附属図書館狩野文庫蔵

まじないの中から、歌の力を期待するものを見てみよう。恋愛の成就に効果があるとされる呪歌がいくつか見られる。「おもふ人をゆめに見るでん」（おもふ事 このままつけよ まくらがみ わがころもでをかへしてぞねる をとなくて着物をかえして寝る）「こゑなくして人をよぶでん」（こひしさにひとりこがれてゐるみをば はやくもさとれ つけのさしぐし という歌をよみ、蛙を逆さにつる）などが紹介されている。

「女ほれるでん」は墓場の柳の葉を取り、「こひすてふ わがなはいま だたちにけり 人しれずこそおもひそめしか」という歌を三度書き、まゐめて真綿にくるみ、女性が気づかぬようにたもとへ入れるというもの。歌とは、本来声に出すものではないかと思うが、このまじないでは三度「書く」のである。呪歌をとまじないは、社会における識字率と関係なく、口頭で伝承することが可能だ。だが、ここでは、口に出す行為以上に、書く行為が重視されている。『妙術智恵鑑』における、書記行為の重視は他にも見られる。例えば、運を強くするお守りの作り方として、半紙を九つに折って切り、そのうちの八つに「きじのいへあしのふるすへ たち出て またたちかへる あしのふるさと」という歌を書いて焼く。その灰で残り一枚に同じ歌を書いて護符にする術が紹介される。この場合も、歌を書く行為ができなければ、お守りが作れない。つまり、歌の呪力はもちろんのこと、歌を書記するという行為、すなわち字を書くことに大きな意味がある。

漢字の力に頼るものもある。安産のまじないとして紹介されているのは、「盃の中へ人が見ないように伊勢の二文字をかき、清い水で飲む」というものである（図2）。人に隠れて字を書き飲みこむというまじないは、行為者自身字を書くことができなければ実行できない。しかも、この場合の字は、仮名ではなくて漢字であるため、難易度が高い。さらに、安産のまじないであるから、行為者は妊婦＝女性である。挿絵も盃

に字を書く女性の姿である。つまり、このまじないは、漢字が書ける女性のためのまじないといえよう。

このように、歌をとなえるまじないと、文字を書くまじないが両方存在し、ともにからみあっている様子が伝授本にはみえる。『妙術智恵かがみ』には、眠気の出ぬ伝として、次のような技が紹介されている。「賦」の字を紙に書き、鼠の糞を三つ包み、へその上に置くと眠くならないというのである。「賦」の字を書く行為を伴うまじないは、他の文献でもしばしば見かける。『秘事』でも、「諸人船によはざる呪い」として二種のまじないが紹介されている。一つは、「船の中に賦の字を書き、武のてんを人の額にうつべし 少しもよはざる事奇妙なり」で、ここでも「賦」が使われている。さらに、もう一つの方法として船に片足乗りかけた時、「ながきよの とおのねむりのみなめざめ なみのりふねの

図2 『妙術智恵鑑』
東北大学附属図書館狩野文庫蔵

おとのよきかな」と三度よみて乗るべしという。こちらの方は、呪歌を使う方法である。

それにしても、なぜ「賦」の字なのだろうか。試みに手元の漢和辞典『新字源』で「賦」を調べてみると、「詩歌を作る」となえる。うたう。詩歌をとなえる」などと説明されていた。そこで、「賦」の字を書くまじない行為には、もともと詩歌を作るあるいは唱えるという行為が付随していたのではないかと考えてみたい。

眠くならないまじないは、先行のまじない書にも既に色々な例があり、例えば『咒詛』では、「左の手に大の字を三字書き、舌でなめる」という行為を行い、「うちとけてもしもまどろむ事あらば ひきおとろかせ わがまくら神」という歌を三度読むことになっている。また、『陰陽師』では「人丸やまことあかしのうらならば われにも見せよ人丸が塚」という歌を三べん慎み詠むべしとある。これらの歌は後続のまじない本にも繰り返し見られ、江戸期には知られたまじないだったようだ。このことから、眠気をさまし夜起きているための方法として、古くは呪歌がとなえられるのが一般的だったと考えられる。それが、歌をとなえるかわりにその意味を持つ漢字「賦」を書く方法が考案されるようになったのではないだろうか。書くしぐさ、それ自体の呪術性が認められていたともいえよう。²⁵⁾

専門家集団の管理下にあったまじないが江戸期に大衆化する、その過程において、術が容易になることはあっても難しくなることは考え難い。俗人が日常生活の中で手軽に実行できるようなスタイルへ、まじないは簡略化されると思われる。だが、こういった行為が手軽で実行しやすいかは、人によって異なるのである。呪歌をとなえるまじないは、その歌さえ記憶しておけば文字を知らなくてもできるし、他者に口で伝えることも可能だ。その一方で、火傷の時に船酔いの歌をよんでも効果を期待できないように、状況にふさわしい歌をそのつど思い出す能力(記

憶力)が必要とされる。すぐれた記憶力がある人にとってはそれほど難しくもないはずの歌を覚えておくということが、別の人にとっては、一文の漢字を書くよりも容易ではない可能性がある(少なくとも私にとっては、呪歌を暗記するよりは、本を見ながら漢字を書く方が楽である)。文字を知る者は、本に書かれたまじないの方法を読んで実行することができる反面、その能力ゆえに、まじないの歌を覚える意欲や能力を喪失してしまっただけかもしれない。

江戸期の手品本に載せられたまじないは、呪歌を伴うまじないと、字を書くまじないが混在している。『秘事』の場合は、船に乗る時に字を書くか呪歌をよむか、どちらかを選択できる。行為者の能力や資質にあわせてまじないができるようになっていくところに、私は江戸時代のまじない文化の大衆性を感じるのである。

あとがき

以上見てきたように、江戸時代における呪術は、手品や医学などと深くかかわっており、広い意味での秘術に属するものであった。そして、秘術全般が文献を通じて大衆化していったことをうけ、まじないの情報も様々な文献に載せられた。筆者は伝授本を主に対象として検討してきたが、今後の課題として、広く生活実用書全般に目を配り、より多くのまじないを採取することが挙げられる。

また、中国との比較検討も重要な課題である。中国の文献を範として出発した江戸期の手品本は、まじないや生活術などの情報をふんだんに取り入れながら、独自の発展をとげていった。『続神仙戯術』の降雨量占いについては、中国の様々な文献に類似の方法があるようだ⁽²⁶⁾。また、『続神仙戯術』の「茄子を多く実らせる術」は、中国の『西陽雜俎』巻十九にも見られるまじないであるが、江戸期の日本の文献でも繰り返し

見られる。『続神仙戯術』のほか、『男女重宝記』や『古今知恵枕』などに、ほぼ同じ内容が記されている。日本の著者たちが何を参考にしていたのかは不明であるが、文献を通じて中国のまじないが日本人の日常生活の中に浸透していったことはたしかである。

まじないは、行為者の日常生活上の必要に応じて行われるものである。外国のまじないを輸入しても、生活環境が異なるためにそのままの形では使えず、変更される場合もあるだろう。『神仙戯術』の燕が来なくなるまじないは、鳳凰という字を書いた符で撃退するものだが、日本の『調法記』や『庶民秘伝重宝記』では、「つばめ来らざる傳」として、燕の巢のほとりに「戊」という字を書くとき来なくなるという⁽²⁷⁾。類似のまじないであるが、「鳳凰」ではなく「戊」一字になっている。漢字を書く時に「鳳凰」と「戊」のどちらが簡単かは、いうまでもない。日本の文献では、漢字を簡略化した方法が記されているのである。その他、『神仙戯術』の蚤などの虫の駆除方法も、後続の文献に出てくる。『秘事百撰』三篇には「萱の下へ萱蒲を敷置べし」、『妙術智恵かがみ』では「萱蒲と塩を床下へ敷き置くべし」となっており、いずれも部分的に『神仙戯術』と共通している。

もともと日本の呪術文化は、古来中国から多大な影響を受けてきたわけではあるが、両国の比較研究の必要性をあらためて感じる。とはいえ、筆者は中国の呪術、呪法についてはあまりにも無知であり、識者のご教示をいただきたく思う。

註

- (1) ヴェルコール『人獣裁判』小林正訳、白水社、一九五三年、二〇一〜二〇二ページ
- (2) 嶋津宣史「護符と神棚」千々和到編『日本の護符文化』弘文堂、二〇一〇年、二十三ページ
- (3) 横山泰子「素人の演出する怪談芸―江戸時代の『妖怪手品』について」服部

- 幸雄編『寛政期の前後における江戸文化の研究』千葉大学大学院社会文化科学研究科、二〇〇〇年所収、「明治の妖怪手品」『法政大学小金井論集』一〇号、二〇〇四年所収、「妖怪を作り出す江戸時代人―手品本に見られる『妖怪手品』の系譜―『民族藝術』二十二号、二〇〇六年所収
- (4) 国立劇場編集『国立劇場演芸資料館所蔵緒方奇術文庫書目解題』、紀伊國屋書店、山本慶一筆、一九九二年、七ページ。泡坂妻夫『大江戸奇術考』平凡社新書、二〇〇一年、四十八ページ。藤山新太郎『手妻のはなし』新潮選書、二〇〇九年、一三八ページ。松山光伸『実証・日本の手品史』東京堂出版、二〇一〇年、三七四ページなど。
- (5) 傳起鳳・傳騰龍『中国芸能史』岡田陽一訳、三一書房、一九九三年、一七八ページ
- (6) 本稿での『神仙戯術』ならびに『統神仙戯術』の引用にあたっては、高田史郎による私家版『神仙戯術』一九九六年、『統神仙戯術』一九九九年を使用した。両書とも、影印に加え、語釈・現代語訳を付してあり、参考になった。
- (7) 山本、前掲書、八ページ
- (8) 松山、前掲書、三七四ページ
- (9) 米村傳治郎監修 中川悠紀子著『親子で楽しむ科学実験』宝島社、一九九九年、一八八ページ
- (10) 松山、前掲書、三七四ページ
- (11) 山本、前掲書、八ページ
- (12) 唐再豊『鵝幻彙編』桃花僊館藏本石印、光緒十五年
- (13) 松田智弘『日本と中国の仙人』岩田書院、二〇一〇年、八十一ページ
- (14) 『日本庶民文化史料集成 第九巻』三二書房、一九七四年、三一七ページ
- (15) 泡坂、前掲書、四十九ページ
- (16) レジナルド・スコットについては、松谷偉弘『奇術と魔術15―16世紀悪魔学とその周辺』国際基督教大学提出博士論文、二〇〇八年 を参考にした。Discoveries of Witchcraft という洋書のタイトルは様々に和訳されてきたが、本稿では松谷訳の『魔術の暴露』を用いた。
- (17) 小池淳一『呪術の歴史と民俗―歴史研究の最前線』八号、二〇〇七年 なお、小池を研究代表者とする『呪術・呪法の系譜と実践に関する総合的調査研究』平成十六～十八年度科学研究費補助金 基盤研究(B) 研究成果報告書では、付録DVDで『呪詛調法記』が読めるほか、論考が興味深い。なお、呪術系の『調法記』は、現在臨川書店の『重宝記資料集成 俗信・年暦』におさめられている。
- (18) ハイエク マテイアス「江戸時代の古い本 馬場信武を中心に」小松和彦選 暦記念論集刊行会編『日本文化の人類学／異文化の民俗学』法蔵館、二〇〇八年所収
- (19) クロード・レヴィ・ストロース『構造人類学』荒川幾男 生松敬三 川田順造 佐々木明 田島節夫共訳、みすず書房、一九七二年、一九二～一九七ページ
- (20) 元三大師籤本については、大野出『元三大師御神籤本の研究』思文閣出版、二〇〇九年 を参照のこと。同書によると、「元三大師籤本」の最も古い本は、寛文二(一六六二)年の跋を持つ『天然靈感観音籤頌 百首』である。
- (21) 刊行された古い本については、井上智勝「近世の易占書」笹原亮二編『口頭伝承と文字文化 文字の民俗学 声の歴史学』思文閣出版、二〇〇九年所収が詳しい。井上によると、十七世紀前期まで、易の知識は宗教者の存立基盤に係わる知識・技術ゆえに「秘伝」として口伝・あるいは写本のかたちでごく限られた人々の間に伝えられ、版行されるようになるのは十七世紀後期以降であったという。
- (22) 手品本の歴史については、山本、前掲書を参考にした。
- (23) 『秘事百撰』については、横山泰子「秘事百撰の世界」『小金井論集』一六号、二〇〇九年を参照されたい。
- (24) 現代人の目からすると、当時の文献には実用的とは思えない奇妙な記述が含まれている。耳だれの妙薬の如き医療に関する箇所については、素人ながらも医学的效果に疑問を感じる。だが、現代的な視点から、当時の呪術や医療をやみくもに否定すべきではない。大貫恵美子『日本人の病氣観』(岩波書店、一九八五年、三二六ページ)は「一般の人々の存在論的関心に応えることなくして、いかなる医療体系も医学的有効性を發揮しえないのであるから、ある特定の医療体系をその医学的有効性のみによって判断することは、救い難い誤りである」と述べる。江戸期の文献に接する際にも、「当時の一般人の存在論的関心に応えたであろう」ことを前提に、考察せねばなるまい。
- (25) 川島秀一「〈書く〉しぐさの呪術性」『伝え』十二号、日本口承文芸学会、一九九三年
- (26) 中国の呪法については、澤田瑞穂『修訂中国の呪法』平河出版社、一九九〇年、第四輯 を参照。
- (27) 長友千代治編『重宝記史料集成 俗信・年暦2』第一七巻、臨川書店、二〇〇六年、五十六ページ、一二四ページ
- (法政大学工学部、国立歴史民俗博物館共同研究員)
(二〇一一年七月一四日受付、二〇一一年一月一日審査終了)

Publication of Secret Arts : Incantations in Books of Magic Tricks during the Edo Period

YOKOYAMA Yasuko

Books that explain magic tricks published in Japan during the Edo period contain not only magic tricks but also information on incantations. These texts do not attract much attention from the perspective of the history of magic. However, they are interesting subjects of study to get an idea of the sense of people at a time when magic tricks and black arts intermingled.

This article gives an overview of books of magic tricks in early modern Japan, starting from the translation of the Chinese “Shinsengejutsu,” and dealing with the incantations described in the same. “Shinsengejutsu” in the early time and the “Sequel to Shinsengejutsu” bring together not only magic tricks but also incantations and tips for living, etc. Originally, magic tricks as entertainment to showcase miraculous phenomena via tricks and gimmicks, and information on incantations, etc. were also mixed in China. The view of magic in Japan, meanwhile, seems to have been influenced by that of magic in China. Because black arts similar to those in China also appear in Japanese magic books, the Chinese incantations might have penetrated into the Japanese everyday life through these books. However, the methods used for incantations differed between Japan and China. When the foreign black arts were imported, they would have been changed to suit the Japanese living environment.

The incantations would have originally been conveyed orally and in secret, but during the Edo period, they were written down in books as practical knowledge and went into circulation. By a curious coincidence, the books that publicized the so-called “secret arts” such as those of incantations, magic tricks, fortune telling, etc. began to be published in the last half of the 17th century, which marked the opening of the period of publication of secret arts in Japan. Some incantations in the books of magic tricks resemble those in the preceding books of black arts. The information on incantations in specialized books would have flowed into the books of magic tricks.

Some incantations described in the books of magic tricks are also accompanied by curse songs and writing actions. In early modern Japan, people’s literacy rate improved from the 17th century, and such social background relates to the existence of the books of magic tricks and incantations in writing. The popularity of the culture of incantations during the Edo period is seen in the potential of various incantations according to the abilities and qualities of those who performed them.

Key words: Magic tricks, Japan, comparative culture, incantations, secret art
